

別紙 4

報告番号	※	第	号
主 論 文 の 要 旨			
論文題目	沖縄県八重山諸島における「学校芸能」の創造と展開に関する研究		
氏 名	呉屋 淳子		
論 文 内 容 の 要 旨			
<p>本学位申請論文は、現代社会における民俗芸能の新たな継承の場のひとつとして学校という特定の場所を対象に、学校教育が民俗芸能の継承に果たす役割とその機能を複合的に明らかにするものである。その際、学校という特定の場において、現代的な文脈における文化継承のあり方や、そこで新たに生み出される芸能を「学校芸能」と定義した。そして、これまで学校教育における民俗芸能の教授に関する議論において検討されてこなかった側面、すなわち、民俗芸能を「継承・創造」するアクターとしての学校という場の機能を考察の対象に加えた検討を試みた。</p> <p>近年、民俗芸能の継承の形態は大きく変化しているだけでなく、近代的な制度や考え方に影響を受けている。学校教育との関連で言えば、民俗芸能の継承の場として学校の存在は看過できなくなっている。こうした状況は、地域社会のみを民俗芸能の継承の場として捉えることの限界を示しているといえる。つまり、学校が地域社会の重要な構成要素として、民俗芸能の継承の場として機能している。本論文が日本のなかでも「八重山」を対象としたのは、次の点にある。かつて独自の文化を維持してきた八重山の人々の意識において、一世紀以上にもわたる近代化を経てもなお、八重山の民俗芸能への親しみが根強いばかりでなく、八重山芸能が学校教育のなかで積極的に受容され、柔軟に展開している。こうした現象は、むしろ全国的にみても特異であり、八重山の人々が自らの民俗芸能に対する自意識を強く持ち続けてきた顕われであるといえる。しかし、学校教育の場で八重山の民俗芸能を用いた積極的な教育が志向されている状況を鑑みると、学校という場は、文化継承という点において地域社会のなかで機能しており、そこには地域の文化を落とし込む空間が存在しているといえる。</p> <p>そこで、本論文は、民俗芸能の実践の場としての学校の検討を行い、地域社会と教育現場における教育知の伝達過程を「連続したもの」として捉え、学校教育の場で民俗芸能が創造されながら継承される動態性とそれらが担う意味に注目した。</p> <p>本論文は、三部構成をとる。第一部「現代における民俗芸能と学校を巡る問題と視角」では、これまでの教育と文化の研究や民俗芸能研究に焦点を当て、そこから浮上した問題点と課題を踏まえて、現代社会における民俗芸能の実践と学校の関係性を「学校芸能」か</p>			

ら捉える分析視角を提示した。まず、第一章「八重山諸島の地理的、歴史的、政治的、社会的背景」では、議論を進めるにあたっての基本的な概念の再検討を行った。戦後沖縄の教育は、奄美や沖縄本島、宮古・八重山諸島のそれぞれの地域で確立した学校制度から出発している。こうした学校制度が独自に確立していった背景には、八重山の人々の文化的アイデンティティが顕著に顕われており、こうした文化的アイデンティティが、その後の学校教育における民俗芸能の実践を促していたことが明らかになった。

第二部「現代沖縄における八重山芸能の成立と『学校芸能』の関わり」では、今日の学校教育に導入された八重山芸能について論じる上で必要な八重山芸能の歴史的、社会的、文化的背景を踏まえつつ、八重山芸能の成立がどのような人的交流を経て創造・展開してきたかについて明らかにした。とりわけ、八重山芸能の成立は、近世琉球期まで溯り、八重山諸島の島々に琉球をはじめ薩摩の役人たちが「移動」してきたことによる新しい芸能の移入をきっかけとしている。いわゆる、複数の地域を代表する芸能の「ハイブリット化」は、農民階層のもとで育まれてきた八重山の歌や踊りが「人々の移動」によって、新たな芸能に創造されるといった経験をもたらした。さらに、こうした新たな芸能の創造は、八重山芸能の成立に深い影響を与えており、その継承形態の独自性も生み出した。こうした八重山独自の継承形態は、沖縄で展開する琉球古典芸能とは異なる継承のあり方と、対沖縄との関係性を知る手がかりとなった。また、戦後沖縄における八重山の社会には、米国の支配下に置かれつつも、八重山の人々自らが沖縄とは区別しながら形成してきた文化的アイデンティティが存在した。

第二章「現代沖縄における八重山芸能とその成立過程」は、こうした文化的アイデンティティ形成の装置として八重山芸能を捉えようとするものである。ここでは、八重山の民俗芸能を取り巻く社会的事象との相関性を踏まえて、八重山芸能がどのような人的交流のなかで創造されてきたかについて明らかにした。また、戦後沖縄・八重山における芸能の隆盛と普及を図った沖縄特有の芸能教授システムである「研究所」に着目した。特に、地域社会と教育現場が「研究所」を媒介しながら芸能の教授が行われている様相を明らかにした点は、地域社会と学校の連続性を考察する上で最も重要な視点であった。そして、復帰後の八重山において、国の無形文化財として指定された民俗芸能の保存と継承が、地域社会だけでなく学校における民俗芸能の教育にも影響を及ぼしていたことを明らかにした。特に、学校が主体となって民俗芸能の教育に取り組んでいるだけでなく、民俗芸能の保存と継承に対する意識が八重山の人々に内面化される様相を明らかにした。

第三章「『学校芸能』の誕生と変遷：1960年代～1970年代の萌芽期」では、八重山芸能が学校教育のなかの持続的な取り組みとなった契機が、1960年代の「郷土芸能クラブ」の誕生であったことを明らかにした。しかし、当時の八重山では、地域の民俗芸能を学校で「教育する」という価値観が存在しなかったことから、学校という学

びの場において民俗芸能を実践することや、それが積極的に受容されるようになるまでにはさまざまな困難な状況があったことを明らかにした。とりわけ、八重山芸能が学校のなかで受容されていく過程には、八重山の人々が自らの文化を「客体化」し、「八重山文化」を八重山内部において積極的にアピールしていく状況と連続していた。また、1972年の沖縄の日本本土復帰以降、沖縄経済復興、観光振興の開発計画の導入に対応しながら、八重山内部において「八重山文化」の再構成がなされていった。こうした八重山の人々自身の自文化に対する「捉え直し」は、特に、学校教育の場において八重山芸能を積極的に導入させる原動力となり、受容される過程のなかで顕著になった。こうした学校教育を取り巻く外部アクターとの関わりを通して、学校という場が地域の芸能を表象していく過程を明らかにした。

第三部『学校芸能』の現在では、学校の文脈のなかで新たに創造され、展開していく八重山芸能を「学校芸能」という視角から考察した。特に、複雑なアクター（政治性、文化・歴史性）が絡み合う八重山の民俗芸能の動態性や創造性に着目しつつ、持続的な民俗芸能の継承のあり方について考察した。具体的には、学校に持ち込まれる八重山芸能の実践を八重山の3高校における「郷土芸能クラブ（部）」の事例と教育課程のなかで扱われる「伝統と文化」に関する事例から照射し、八重山の人々の文化的アイデンティティの生成との相関性を踏まえながら論じた。

第四章『コンクール』という制度では、地域社会と学校の双方でのフィールドワークから得られた事例をもとに、八重山の3高校とそれを取り巻く地域社会の視点から学校という「場」の捉え直しを行った。その結果、学校が「主体」となった八重山芸能の実践が行われていることを明らかにした。また、こうした過程には、八重山の人々にとって「伝統」を改めて選びとる意味をもつことが示された。

第五章「現代八重山の高等学校における八重山芸能の実践と教育課程」では、現代社会における地域社会の変容によって民俗芸能の保存・継承を取り巻く状況が変化していることから、地域社会の変容に伴って変化する民俗芸能と学校教育との相関性について、学校制度の側面から考察した。そして、学校教育における民俗芸能の実践のあり方とその特徴的様相を明らかにした。本論文で取り上げた八重山芸能が、一見「伝統的」と思われる民俗芸能である一方で、近代的な制度や考え方がその成立の根本に関わるほどに影響を受けていることを指摘した。

第六章『学校芸能』の現在：八重山芸能の持続を巡ってでは、八重山の3高校で展開する郷土芸能部の事例をもとに、「学校芸能」の現在の状況について論じた。ここでいう「学校芸能」とは、次のような特徴をもっている。①「学校芸能」は、地域社会やその他、外部アクターからの影響を受けながら、学校の文脈のなかで民俗芸能が教授されている。②また、「学校芸能」は、地域内外にとどまらず、幅広い社会的文脈において展開している。③そして、「学校芸能」は、実践者たちによって過去から現在まで受け継がれる伝統として認識されている。さらに、未来に向けて受け継いでいこ

うという意識付けや、将来に繋げていこうとする意識の生成が、当事者たちの実践のなかでみられることを明らかにした。こうした学校における一連の教育は、地域の民俗芸能を継承する役割を担う者を生み出すことにも繋がっている。八重山の3高校の事例研究をもとに、「学校芸能」は、地域社会との連携が重視されながら行われつつも、学校が主導する民俗芸能の新しい継承形態を生み出していることを明らかにした。

終章では、結論として以下の点を指摘した。第1に、学校という場において民俗芸能が積極的に教授されるようになり、今や伝統的な継承形態の枠組みを越えて、地域社会における民俗芸能を継承するひとつの「場」として学校を捉える必要がある点である。第2に、学校を主体とする八重山芸能の意識的な継承活動は、八重山芸能の持続に向けた地域社会の文脈において「翻訳」され、地域独自の民俗芸能を創造し展開する高まりのなかで、八重山の人々の文化的アイデンティティの中核を担っていた点である。第3に、こうした状況のなかで生み出される民俗芸能を「学校芸能」として捉えることによって、学校という場が民俗芸能を創造しながら、継承する「装置」としての役割を担っている点である。さらに、こうした状況は、自らの文化と出会い、新たな価値体系を創造する機能として作用していることを明らかにした。

以上、本論文では、民俗芸能の創造と継承の様相を学校教育から示し、学校教育の果たす役割と機能の検討から、民俗芸能の持続的な継承の可能性について描き出した。とくに先行世代から受け継がれてきた民俗芸能が、各地域社会への帰属意識の生成に伴い、地域を強調した内容へと発展していることを明らかにした。さらに、学校教育が新たな継承の場として加わりながら、学校で教授された芸能が地域における民俗芸能の一つとして展開し、かつ地域社会に受容されている構図も明らかになった。こうした状況は、地域社会内部で形成された文化的アイデンティティが社会変動とともに常に創造され続けるものであることを示すと同時に、学校教育における民俗芸能の教育が、地域社会においても重要な意味を担っていることを示した。